

のどかな田舎町で、戦争や災害とは無縁で平和に暮らしてきたが、絶体絶命のピンチがあった。

あれは8月、暑い夜。とくに15歳を越えたころ。友人や後輩6人で港で花火を楽しんでいた。垣根を隔て50mほど離れた場所では、別のグループも花火を楽しんでいる。酒が入っているのかすごいしゃびりだ。われわれも負けじと手持ち花火や打ち上げ花火でフアイヤー！そ

馬場 雅子

木 蔭



んな楽しい夏休みの夜になるはずだった。

一天にわかにかき曇り、空に轟く雷鳴。あれよあれよという間に激しい雨が降る。頭上へ迫る不穏な音と光。瞬間、別グループのあたりに稲妻が走る。落雷だ！に

15 の 夜

！後輩3人は家族に車での迎えを頼み、建物の陰で泣きながら雨をしのいでいる。私の家族は車以前に運転免許すら持っていない。私を含む年上組3人は、チャリと徒歩での帰宅を決断。それが間違いと

ぎやかだった若者たちの声が途絶えたが、他人を気遣っている余裕はない。逃げろ

直撃。アスファルトに放射線状の火花が飛び散る。「○△□」!!一言葉にならぬ悲鳴を上げ、地をはうように蛇行し、3人クモの子を散らすように逃げ回った。横、前、後ろに計3発。阿鼻叫喚の地獄絵図から、全員生還を果たすも、帰路の間の記憶がない。

イクで走り出すようなドラマチックな年ごろのイメージだ。宇多田ヒカル氏は、Automaticで鮮烈なデビューを飾り、藤井聡太氏は既にプロ棋士として後に名人となる片りんを見せていた。それに比べ15歳の私ときたら…。有名人と比べるのも変な話だろうか。しかし「生きていてよかった」と心から思えた、そんな15の夜だった。(ブランテムタナカ 製缶グループ主任)